

NEJIREBANE, No. 86, 15. Mar.2000

## 林 匡夫博士の思い出

澤田高平

林先生は生前よく学会の席上で、世界のカミキリムシの分布帯について実例をまじえて話された。私も大変興味深く聞かせて頂いたものだが、良く知られているように林学説ともいえるこの仮説は世界の気候帯に適応した植生と、そこに分布するカミキリムシを大きく4つの分布帯に分け、その見地から日本のカミキリムシ相の解明を試みられたものと解釈しているが、1960年頃の私にはまだよく内容を理解することはできなかった。1970年前後に、*Pidonia* 属のモノグラフを逐次発表され、その中で本属の垂直分布と系統を解析された。林先生から別刷を頂いて詳細で高度な内容に驚き、畏敬の念を持って読ませて頂いた。1960年から1970年にかけてのこれらの御研究が林カミキリ学の論理を成すもので、その後に発表された膨大なお仕事はその応用ともいえるものと思う。27歳の折に書かれた「カミキリムシの話」を手にした時、私は使われている漢字も難しく始めは敬遠していたのだが、何度か努力して読むうちにやっとこの甲虫類のアカデミックな全体像を多少とも理解することができたのだと思う。さらにこの完成度の高い解説文の中に、すでに分布帯に対する林先生の考察が示されていることに気付いて、早くから構想を練っておられたことに興味と感銘を受けた。

その後、大阪市住之江区に移られ、私もときおり学会の交換雑誌の閲覧などでお伺いしたが、その時代にも非常に多くの外国雑誌が保管されていて、林先生が交換の為の手紙のやりとりなどの情報を詳細に、美しい文字で見事に大学ノート記入されていたのを垣間見たことがある。あるとき奥様がお茶を出されて「うちの人は研究熱心で、良く勉強しはります」としみじみ話された。その言葉通り林先生は晩年に入っても研究意欲はますます盛んで、PARIS の自然史博物館に保管されているアジア産の LEPTURINAE のタイプの再検討という大変大きい仕事を Dr. VILLERS と共著で発表され、カミキリ学の世界的分類学者の地位を不動のものとした。その後も続々と論文の発表が続くうちに突然の訃報に接した。日本甲虫学会会長として、また社会的教育活動の多くの組織の長とし

で活躍を続けてこられた、そしていつも暖かく人に接し、権威に情するところがなかった大先輩、林匡夫先生のことはいつまでも忘れることはないだろう。(さわだ こうへい)

## 町人学者・林 匡夫先生と自然史博物館

初宿成彦

大阪らしい言葉のひとつに「町人学者」がある。山片蟠桃、富永仲基、木村兼霞堂など、いずれも大阪(大坂)という中央の政治や権力といったものから離れた位置にありながら、高い学問を築き上げた人物たちであった。アマチュアの多い甲虫研究者の組織、日本甲虫学会が1946年に大阪で産声をあげたのも、この流れと無関係ではあるまい。大阪・船場の呉服屋に生を受け、商売の傍らでカミキリムシ博士になられた林匡夫先生は、この町人学者の流れの中で、最も正統な位置にありつづけた人物のひとりであるといえる。

甲虫学会の大会が12月の第2日曜であることをまだ承知していなかったころであるから、私が大阪の博物館に赴任してすぐの1993年前後だったのであろう。いつも大会を行う集会室が別の研究団体に先に予約されてしまい、この定例の日に行えなくなってしまった。日程を1週間ずらすか、あるいは日程を変えずに他の貸し会場などに変更するか、余儀なき事態が発生したのである。しかし、そのとき林匡夫先生は「これまでもずっと博物館でやってきたのだから、1週間ずらしてでも博物館で開催すべきだ」とおっしゃられ、結局第3日曜日に開催することになった。博物館に対する深い思い入れを感じた次第であった。

この出来事の後、林先生が大阪市立自然史博物館の創立にたいへん尽力された人物であったことを知った。博物館がまだ市立自然科学博物館という名称(略称、大阪科博と呼ばれていた)で、天王寺、朝(うつぼ)と、まだ建物が間借りの状態であった頃、林先生は博物館後援会の評議員を務めておられた。この後援会という存在は行政に対し、大阪に自然史の新博物館を建設させる意味合いがたいへん強かったようである。現在は2,000世帯の会員を有する「博物館友の会」として受け継がれている。

林先生と懇意に話をするというのは若造の私にはあまりにも畏れ多く、大会や例会でご来館の折りにも軽くあいさつする程度のことが多かった。そんなある年のこと、年末の大会のあとの懇親会の席が林先生のお隣となり、いろいろお話できる機会があった。そのときに初めて、林先生が北大で学位を取得されたことをうかがった。ご本人のお言葉のニュアンスを借りれば、在野のカミキリ屋に北大が学位をくれたことをとても感謝しているとのことだった。北大から大阪の博物館に赴任した私に対し、親しみを抱いておられるように感じ、とても嬉しく思ったことであった。

1997年9月例会の席で林先生が、文献と標本のコレクションすべてをいずれ当博物館へ寄贈する、と宣言されたとき、林先生が小生に掛けられたお言葉が今も耳に残っている。この博物館は自分が建てた博物館だと思っている。だから、自分の今まで集めてきたものをこの博物館に収めたいのだと……。

そのほぼちょうど1年後に、まさか現実になるとは思っていなかった。亡くなられた後、標本や文献をいただくため、学会本部のあった住吉区荻田のアパートへ何度も通った。博物館から自転車でも10分もかからない距離である。遺された昆虫学の標本や文献、また個人的なお写真などを拝見しながら、他の誰にも見せていない林先生のお人柄にも触れることができたように感じている。

ご冥福をお祈り申し上げます。

(しやけ しげひこ)

## 林 匡夫先生の思い出の中から

水野弘造

### 林 先生と *Pidonia*

林先生が *Pidonia* に関する研究で学位を取得されたことはあまりにも有名で、その基礎になった四部作：A monographic study of the lepturine genus *Pidonia* MULSANT (1863) with special reference to the ecological distribution and phylogenetical relation. I-IV. によって当時難解とされた *Pidonia* 属の分類・生態に関する研究レベルの全貌が明らかにされ、これを契機に日本のカミキリ学全般が飛躍的に進展したことは周知のとおりである。

ただ先生ご本人はその後、*Pidonia* に関して若干の報文を書かれたものの、*Pidonia* 学のみに入りされることはなく、他の研究課題を次々と手がけられた。

私が塚本珪一氏の採集品で *Pidonia tsukamotoi* タカネヒメハナカミキリを共同記載していただいたと申し出た時、一人で発表しなさいと懇切に指導してくださった。*Pidonia yamato* ヤマトヒメハナカミキリを水野辰司氏と共同記載された林先生にしてみれば、別の水野と共同記載すると今後の話が面倒になると思われたのかもしれない。なにはともあれ、今後 *Pidonia* については若い人に任せるという意向のようであった。

*Pidonia simillima* ニセヨコモンヒメハナカミキリが紀伊半島内で少なくとも二種に分けられそうだという仲間内の話から、その holotype を見せてくださいと城南女子短大に伺ったことがある。Paratype はあるものの holotype が見当たらず、そのうち出てきたら知らせますということで以後心待ちにしながらついに出現しなかった。先生の病気入院中、*Pidonia* も箱によってはカツオブシムシの害を受けたため、*simillima* の holotype もたぶん虫に食われたのであろう。後年同じ場所で採集した標本もあることだし neotype 指定をしましょうか、などとおっしゃったが、neotype 指定という作業は手続きが面倒で、実質何一つ進まないまま先生の寿命が先に尽きてしまった。先生の死去後、遺品標本箱を検したところ、*simillima* は殆どが虫害を受けていた。しかし、holotype 指定のラベルのものは見当たらなかった。運が良ければ他所に移されていたかもしれない。なお、*P. simillima* は大林一夫氏と林先生との共同命名であるが、種ランクでの記載は大林氏の意向だったようである。つまり林先生の手元の Paratypes には、*Pidonia masakii simillima* ssp. nov. とのラベルが付けられていた。

*Pidonia shikokuana* シコクヒメハナカミキリは学名の変遷を経た種であるが、結局のところ BATES の記載した種 *mutata* の synonym ということになってしまった。「先生の記載された種が一つ消えました。」と申し上げたところ、「それは仕方のないことです。」と全然気にされていない様子だった。

*Pidonia* の語源について伺ったところ、語源解説をよく書いた MULSANT には何の説明もなく、自分としてもいろいろと調べてはみたが結局判らず仕舞いです、とのことであった。

*Pidonia* の話をされる林先生は、若い時に心血を注がれたテーマだっただけに実に楽しそうだった。いろいろお尋ねしたいことが今でも数多いが、私自身が冥土に行かなければ実現しないことになってしまった。

### 林先生とナガクチキムシ

分類学者として林先生の主たる専門領域がカミキリムシにあったことは誰もが識るところであるが、原色日本昆虫図鑑(上)[保育社、1955]のナガクチキを中根猛彦先生と共同執筆されたようにナガクチキも専門とされた。共同記載を含めて年代順に次の11種を新種として発表されている。和名は後で付けられたものが多い。

*Hikohohodemia nomurai* NAKANE et HAYASHI, 1955 ヒイロホソガタナガクチキ

- Melandrya quadrisignata* NAKANE et HAYASHI, 1955 ヨツモンナガクチキ(\*)  
*Melandrya flavipennis* NAKANE et HAYASHI, 1955 キバネナガクチキ  
*Melandrya duodecimmaculata* NAKANE et HAYASHI, 1955 ジュウニホシナガクチキ  
*Dircaeaomorpha ? trialbofasciata* HAYASHI et KATO, 1956 ミスジナガクチキ  
*Dircaea shibatai* HAYASHI, 1960 ヨツボシホソナガクチキ(\*)  
*Mikadonius japonicus* HAYASHI, 1960 クロミカドナガクチキ(\*)  
*Symphora miyakei* NOMURA et HAYASHI, 1960 ミヤケヒメナガクチキ  
*Hira humerosignata* HAYASHI, 1960 カタアカナガクチキ  
*Melandrya shimoyamai* HAYASHI, 1960 ルリナガクチキ  
*Melandrya quadricostata* HAYASHI, 1960 ヨツスジナガクチキ(\*)

このうち(\*)を付けた種は既に記載されていた種のsynonymと考えられ、これらを除外すると有効名は7種である。7種とはいえ日本産全ナガクチキ種数の6%を占めるので、ナガクチキ学に対する寄与も小さくはないのである。

前述した保育社版図鑑(1955)と少し後に出た北隆館版大図鑑II(1963)のナガクチキの原色図は、いずれも私がナガクチキにのめり込む最高の刺激剤となったものであったが、オオナガクチキとミゾバネナガクチキについて両図鑑で大きく異なる標本を図示していることが、私には永く引っかかっていた。欧州出張の際、British Museum(Natural History)で両種のtype標本を検視させてもらい、野村鎮先生の図示が正確であると確認した。つまり、林先生はオオナガクチキの小型個体を *M. modesta*、アカアシナガクチキの大型個体を *M. niponica*、と思い込まれていたようで、先生が記載された *M. quadricostata* は *M. modesta* ミゾバネナガクチキに他ならない。以上の内容を林先生に手紙で申し上げたところ、ナガクチキの標本が虫害にあって確認できないが貴君の言われるように私の同定がまちがっていたような気がする、と返信を頂いた。非常に率直な方だった。後日、「先生のナガクチキの記載の打率は6割というところですね。」と今から思えば大変に失礼なことを会食時の歓談中に申し上げたら、「そんなところのようでしたな。」と笑っておられた。ナガクチキの収集欲は晩年も持ちつづけておられ、*Lederia* 属の標本を希望するという事で伊藤建夫氏の採集品の一部を送って差し上げたこともあった。

先生の死去後、遺品標本箱を検したところ、ナガクチキの箱は無残に虫害にあってはいたが、図鑑に図示されたオオナガクチキ(No.1332, 奥士別)の標本[同定ラベル：*M. niponica* LEWIS, Det. M. HAYASHI]には上翅が残っていて、*M. mongolica* であることが確認できた。これらについては日本のナガクチキ研究史上重要なことと思うので、稿を改めて詳述したい。

#### 実現しなかった「ねじればね」誌上での活躍

1995年、当学会運営への参加要請が林先生からあって、「ねじればね」編集を伊藤建夫氏と私が担うことになった。近畿甲虫同好会を前身とする当学会は、いわゆる学者集団からなるレベルの高さを競うのみの学会ではなく、啓蒙活動にも注力すべきで、そのためには和文誌「ねじればね」を充実させて甲虫学の面白さを幅広く訴える必要があるし、採集会なども開催して楽しい学会にしようと林先生ともども語り合った。林先生が各国の博物館を巡られた際に撮影されたカミキリムシ各種のタイプ標本写真があるとのことで、これを順次誌上公開していただくことになっていた。幸か不幸か「ねじればね」には当初の予想を上回る投稿があり、年二回の発行予定を三ないし四回に増やすという盛況が続き、林先生に急いで寄稿をお願いする必要もなく、また林先生も「全北区のハナカミキリ亜科の分類の再検討」あるいは「アジアのアオカミキリ族」など壮大な研究テーマに係っておられる様子だったので、あえて寄稿要請をしなかった。残念ながら、再出発「ねじればね」には林先生自身による原稿が永久に載らないことになってしまった。(みずの こうぞう)

## ザクセン州立ドレスデン動物学博物館を訪ねて (下)

初宿成彦

〒546-0034 大阪市東住吉区长居公園1-23 大阪市立自然史博物館・昆虫研究室

### 市街地にある展示部分と郊外の研究部門

先にも述べたように、この展示部分は1720年以来、街の中心部のツウインガー宮殿にある。中央部に泳ぐように吊り下げられたウミガメが印象的であるが、細長いギャラリーの一角を占めるだけのきわめて小さなもので、展示内容も剥製や昆虫の標本が世界の生物地理区ごとに並んでいるだけである(写真3)。

一方、研究部門は活発で、昆虫学が関係するものだけでも、*Entomologische Abhandlungen*, *Faunistische Abhandlungen*, *Reichenbachia-Dresden*の3つの雑誌が発行されている。これらはいずれも、ドイツ国内のほか東欧各国の研究者らの投稿を受けて維持されているようである。

ドレスデン動物学博物館には常勤のスタッフが昆虫部門だけで6人いて、甲虫が2名、鱗翅類、膜翅類、双翅類、半翅類がそれぞれ1名ずつという配分である。その他にも非常勤のTechnicianやPreparatorが専門職員の数以上に配属されていて、毎日、標本の製作やコンピュータ登録の作業などをしておられる。



写真3. ツウインガー宮殿

### 甲虫のスタッフとコレクション

甲虫屋としては永くこの博物館に勤務するゾウムシ研究者のR. KRAUSE博士がおられる(写真4)。現在では昆虫部門の長も勤め、筆者の滞在中も何度か会議で出張されるなど、忙しい日々を送っておられる。自分あまり英語が得意じゃないから(実際そのようなことはない)と謙遜される、とても温厚なお人柄で、滞在中は私に対し、いつも何か困ったことがないかと気にかけてくださった。



写真4. KRAUSE博士(左)と筆者

そのほか、甲虫を扱うスタッフとして、常勤のTechnicianのO. JAEGERさんや非常勤AHRENSさんのほか、標本製作を担当する方もおられ、甲虫を扱っている人だけでも総勢7~8人は居るようである。ロンドンやパリの博物館よりはたしかに規模が小さいかもしれないが、筆者の勤める大阪市の博物館よりはるかに豊富な陣容である。

昆虫の標本室は、スタッフの研究室のすぐ近くに4つに分かれて位置している。広さはあわせて800平方メートルで、ここに500万点にもおよぶコレクションがある。KRAUSE博士によれば、欧州の博物館では中規模程度でしかないとのことであったが、この博物館を日本に持ってくれば、間違いなくトップになるボリュームである。

この博物館の昆虫コレクションの特色は鱗翅類と甲虫類で、この両群で4つある昆虫標本室の3つ

を占めている。公称では鱗翅類の標本が点数の上ではもっとも多いことになっているようであるが、KRAUSE博士によれば、実質上は間違いなく甲虫のほうが多いだろうとのことであった。

## K. ERMISCHコレクション

甲虫コレクションの目玉のひとつが、ハナノミ科を中心とするERMISCHコレクションである。

故KARL ERMISCH氏(写真5)は、1898年にザクセン州ライプツィヒ市に生まれた。1917年には徴兵を受けて戦地に赴き、顎に手榴弾を受けている。また、第二次大戦前には共産主義活動に傾倒していた時代もあるようである。その後はライプツィヒで師範学校の教員のかたわら、ハナノミ科を中心とした昆虫類の研究に携わっている。



写真5. 故ERMISCH氏

ハナノミ科については70編以上の論文があり、もっとも最初の論文は1936年にEntomologische Blätter誌(32: 241-245)に出版された「ライン州のハナノミ」である。その後、KLAPPERの標本に基づいた中国・福建省産の記載(1941年)、ハナノミ科の属をまとめたワールドレヴィジョン(1950年)、アフリカ方面の種類に関する一連の研究(1952, 1965など)のほか、晩年はモンゴルの*Mordellistena*属の研究(KASZABの標本に基づく)が主なものとなっている。そのほか、南米やオーストラリアの種類についても研究を手がけており、世界のハナノミ科の研究者としては、イタリアのMARIO E. FRANCISCOLO博士と並び称される大家である。1970年に他界したあとは、ザクセン州の昆虫学の中心であるドレスデン動物学博物館に標本が収められている。

私はハナノミ科の研究そのものを始めてから、いつか実際にK. ERMISCHコレクションの標本にあたって調べなければならぬと感じていた。記載論文だけから判断することは不可能な場合があまりにも多いからである。その機会が意外に早く訪れたことはこの上ない幸せであったと感じている。

K. ERMISCHコレクションのハナノミは、ドイツ箱よりも一回り小さな標本箱に40箱ある。実際に標本にあたっての感想として、まずやはり、それまで論文だけから頭に描いていたものに実際に目に触れるということがある。百聞は一見に如かず、とはまさしくこのことであろう。昆虫標本そのものの形態はもとより、集めた標本やそのデータラベル、同定ラベルの年代などを見ることにより、氏がいつごろどのような点に関心があり、研究をしていたかについてが、論文を読む以上によくわかるのである。また、いくつかの論文などから、属の概念などについて氏自身がかなり混乱しているのではないかと感じていたが、それはどうやら確からしいことがわかった。これらの整理をするのが筆者を含め、現在の当該分野の研究に携わるものの仕事であると思っている。

もうひとつ気付いたことは、これは誰のコレクションでもよくあることなのかもしれないが、「タイプ」して標本に記された学名が必ずしも発表されたものではない場合がしばしば存在していることである。私自身は地元の東アジアに最も関心をもって調べているので、この地域のものは比較的よく把握しているつもりであるが、いろいろな属の種類に対して「*fukiensis*」とつけられたタイプ標本は、ERMISCHが論文の中で発表したものよりも明らかに多いのである。おそらくERMISCH自身が、すでに発表されているものと未発表のものを把握しきれていなかったのではないかと思われる。同様の問題については、パリの博物館のPicコレクションでも直面している。

## 欧州の博物館と日本の博物館(大阪市立自然史博物館を例に)

最後に、欧州の大型自然史系博物館3館を訪れての、博物館の運営面に関する率直な感想を述べ

る。

まず、研究室はどこも土日が休みである。展示部門はもちろん休日も開館しているが、研究部分と展示部分がまったく別の組織になっており、研究スタッフはおそらく展示制作時の監修以外はまったく展示には関わることがないであろうと思われる。それに対し、筆者の勤務する博物館では3週に1度、土日の出勤の番が拘束されている上、実質的には普及行事や研究サークル類の会合などで土日に出勤している場合のほうが圧倒的に多くなっている。また、1ヵ月に2度ほどは交替で学芸員が改札窓口、質問対応として張り付くことになっている。特に入館者の多い土日に当たると日常業務が一日まったくできない状況になり、たいへん苦痛ではあるが、市民のようすや企画展の観覧状況を把握できるなど、博物館に勤務する上で有意義な点も多いものだと感じている。

次に、研究室はとても静かである。日常は何をしているかという、だいたい本を開きながらコンピュータのキーボードを叩いている。つまり、きちんと自分の研究をしているのである。電話もときどきかかってくるが、市民から次々にかかってくる質問電話に悩まされる大阪の博物館の私に比べれば、ほんの数分の一程度であろう。

3つめに、一般人にとって、博物館に勤めている人は崇められる存在であるようである。一般人たちとの会話の中で筆者の職業を聞かれ、博物館に勤めていると述べたときの反応は、欧州と日本ではまったく異なっていた。研究施設としてのステイタスがきちんとしている証拠である。

ここで述べたことのうち、いくつかの点は、ある意味で大阪の博物館のほうが先に行っている部分もあると考えている。展示室や電話での市民からの質問に対しても、すべて研究者が答えており、野外行事などの普及に関する事業も自ら表に出て直接行っている。これらのことは欧州の博物館のスタッフに聞かせても、とても驚いておられ、素晴らしいことではないかと感想を述べておられた。博物館の人が「偉い人」であっては、気軽な質問もできないであろう。

しかし一方で、研究に関する面は（日本の他の方々はいざ知らず）、私自身はできていないし、十分にできる状況にあるとは思っていない。一般人々（ひいては行政や政治を司るお偉いさん方）の認識している研究施設としてのステイタスの低さも原因であろうが、率直なところ、質の高い学問レベルを維持する元気を30歳の若さにしてすでにほとんど失ってしまうほど、様々な雑用が日常的にたいへん多いのである。そのあたりのアンバランスを改め、研究面にもう少し補うことができれば、日本の博物館スタイルは世界に誇れる存在になれるのではないかと思っている。

末筆ながら、滞在中にいろいろお世話になったドレスデン動物学博物館の昆虫部長 R. KRAUSE 博士、博物館の歴史などについて詳しくご教示いただいた同館の M. Nuss 博士、その他スタッフ一同に御礼申し上げる。

(しやけ しげひこ)

## アバタツヤナガヒラタホソカタムシの採集記録

生川展行

〒513-0015 鈴鹿市木田町2399

*Pycomerus sculpturatus* (SHARP) アバタツヤナガヒラタホソカタムシは、今まで *Pycomerus vilis* (SHARP) ツヤナガヒラタホソカタムシと同一種ではないかと考えられていたが、平野 (1996) により区別点が詳しく報告され、明らかに別種であるとされた種である。

ただ、今までの記録はタイプロカリティーである神奈川県箱根塔の沢以外、東京都八丈島 (渡辺泰明・相馬洲彦, 1972) で4頭、三重県尾鷲市桃頭島 (生川, 1997) で1頭、同九木神社 (生川, 1997) で1頭、

長崎県対馬(平野, 1975)で1頭が記録されているだけであった(他に, 平野は島根県でも採集されたことを述べている).

今回筆者は, 三重県南部で多数の本種を採集することができたので, 報告しておく. なお, ご多忙のところ既産地等についてご教示いただいた平野幸彦氏, 並びに標本写真を撮影いただいた稲垣政志氏に, 心よりお礼申し上げます.

三重県度会郡紀勢町錦,

44exs., 1.V.1999; 19exs., 8.V.1999; 27exs., 15.V.1999; 1ex., 21.V.1999; 5exs., 29.V.1999; 1ex., 5.VI.1999; 9exs., 4.VII.1999; 12exs., 17.VII.1999; 2exs., 28.VIII.1999. 全て筆者採集, 保管.

大部分の個体は, 海岸沿いの照葉樹林の中で, マツクイムシの被害にあつて伐採されたマツの倒木の樹皮下から得たものである. この場所には約20本ほどのマツの倒木があったが, 本種が得られたのはその内の4本だけで, 下記のような共通点があつた.

1. 樹皮を手で剥がすのに, ある程度力が必要な状態で, アリやシロアリの巣となっていない.

2. 倒木の切り口に近い部分にのみ見られ, キクイゾウムシの一種と一緒にいることが多かった.

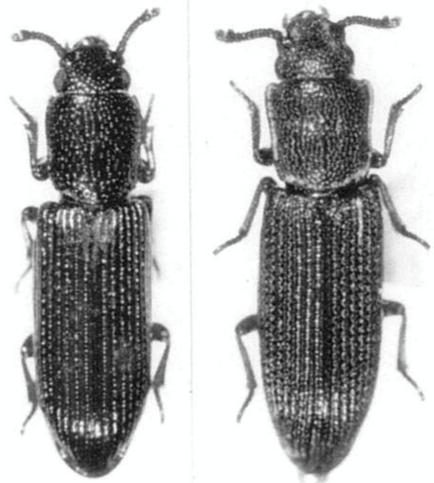
なお, ツヤナガヒラタホソカタムシは同じ場所で, シイ等の倒木の樹皮下からも得られたが, アバタツヤナガヒラタホソカタムシの方は, マツ以外の倒木の樹皮下からは得られなかった. 7月, 8月には灯火に飛来した個体も得られたが, 全て触角等が破損した個体であつた.

今回の採集経験から, ツヤナガヒラタホソカタムシと比較して, アバタツヤナガヒラタホソカタムシは光沢がなく, 前胸背の形状が違う点は特徴的で, 色彩もマツの樹皮下の色とよく似ており, 気を付けないと見落とししそつであつた.

文献

平野幸彦(1996)アバタツヤナガヒラタホソカタムシは絶滅種か. 神奈川虫報, (115):19-22.  
生川展行(1997)アバタツヤナガヒラタホソカタムシを三重県で採集. ねじればね, (76):4-5.  
生川展行(1997)アバタツヤナガヒラタホソカタムシの採集記録. 北九州の昆蟲, 44(2):166.  
渡辺泰明・相馬洲彦(1972)三宅島の昆虫相. 農学集報, 17(1):1-58.

(なるかわ のぶゆき)



右: アバタツヤナガホソカタムシ  
左: ツヤナガホソカタムシ

## 大阪府におけるルリケイメクラチビゴミムシの採集記録

北山健司

〒570-0034 守口市西郷通 4-13, 8-210

ルリケイメクラチビゴミムシ *Trechiana ruri* ASHIDA は, 京都府園部町深山の地下浅層で得られた標本をもとに1998年に記載された無翅無限のチビゴミムシである. 基準産地以外では, 園部町瑠璃溪でも採集されている(1♂1♀, 28-VIII-1998, 奥田好秀氏私信)が, これら2ヵ所以外からの確認記録はなかった.

筆者は最近, 大阪府能勢町において本種を採集しているので報告しておく.



ルリケイメクラチビゴミムシ

1♂, 21-VIII-1999, 大阪府能勢町天王 (標高510m), 北山健司採集

本種を採集したのは、能勢町天王の北西部にある羽束川上流部右岸側の小さな谷で、基準産地から西側に約 3.5km 離れた場所であった。本種の基準産地である深山は大阪府能勢町との境界部に位置することから、発見当初より大阪府においても本種が生息するものと予想されていた。今回本種を採集した場所は尾根を介して兵庫県篠山市に隣接しているため、兵庫県においても本種が生息する可能性は高いものと考えられる。なお、末筆ながら同定をしていただいた芦田久氏、及び本種の記録をご教示下さった奥田好秀氏に深く感謝の意を表する次第である。

文献

ASHIDA, H., 1998. Elytra, Toko, 26(2)289-295.

(きたやま けんじ)

## 奥多摩町北部におけるヨウザワメクラチビゴミムシの採集例

亀澤 洋

〒344-0113 埼玉県北葛飾郡庄和町新宿新田222-62

ヨウザワメクラチビゴミムシ *Trechiana tamaensis* YOSHIDA et NOMURA は、東京都五日市町養沢鍾乳洞で得られた雌個体をもとに1960年に記載された無眼のチビゴミムシである。その後、大岳鍾乳洞、御岳山、御前山、高尾山、八王子市高尾町旧日本軍の防空壕、神奈川県大垂水峠で得られているが、筆者は既産地からやや北方にずれた地点において本種を採集したので記録しておく。関東山地中部の比較的広範囲に生息すると予想される本種の分布確認が、今後どこまで広がるか興味をもたれる。

3♂♂3♀♀, 11. IX. 1999, 東京都西多摩郡奥多摩町小川谷 (標高850m)

人形山麓部にあたる砂防ダム上部のテラスで、岩盤に沿って生じた流水あとの空隙 (地下50cm~1m) より見つかった。標本の一部を京都市の芦田久氏に検していただいたところ、雄交尾器の形態から本種とのご教示を受けた。日頃からお世話になっている同氏には、写真撮影および文献入手に際しても、今回ご助力いただいた。末筆ながら、心よりお礼申し上げます。

参考文献

YOSHIDA, A. and NOMURA, S., 1960, Jap. J. Zool., 12: 493-496.

UÉNO, S.-I., 1960, Mem. Coll. Sci. Univ. Kyoto, (B), 27: 49-58.

UÉNO, S.-I., 1981, Mem. natn. Sci. Mus., Tokyo, (14): 117-132.

UÉNO, S.-I., 1982, J. speleol. Soc. Japan, 7: 87.



ヨウザワメクラチビゴミムシ

(かめざわ ひろむ)

## 虫屋の広場 (25)

シンポジウム「DNAで辿る昆虫の系統と進化」拝聴記

大澤省三先生主宰のオサムシ研究プロジェクトが6年間の輝かしい成果を残して終了し、その経

括シンポジウムが高槻市の京都ホテルで2月11-12日の二日間開催された。

編集子(水野)は化学技術者の端くれではあるが、DNAとかミトコンドリアなどの術語の飛び交う生化学・分子生物学分野は全く不案内のため、どの程度に内容の理解が出来るか不安があった。ただ昨年末の甲虫学会総会で、曾田・谷垣両氏によるこの分野の研究発表を聞いて、動物分類学に革命をもたらす性質の学問分野であることはおぼろげに理解できていたため、興味津々、全講演を退屈することなく拝聴した(理解できたかと尋ねられれば、残念ながら全く理解はできていない。しかし示された結果の面白さは驚嘆に値する。)

第1日目から会場は補助席が詰まってしまう盛況で、二日で計202名の参加人数を数えた。何よりも幅広い分野から関心をもたれている証拠であろう。甲虫屋のみならず、遺伝学者、進化学者、生物物理学者、蝶学者、トンボ学者、プロもアマも老若男女さまざまの人々が、全国から泊りがけで参加された様子であった。

講演の前半は主テーマ、オサムシの分子系統解析の話で、世界中の種を研究対象によくぞ短期間にこれほどの解析ができたものとその担当者の熱意、努力とチーム統括者・大澤先生の並外れた頭脳・手腕に感服のほかはない。個々の内容については概略が「おさむしニュースレター」(1)-(20)に述べられてきた(編集子は部分的に目にしたことはあったが、不勉強し、今後詳細な報告が発表される由であるからそれを期待しよう。後半は研究手法を他の分類群へ適用した結果や中間報告で、ハナカミキリ、コガネムシ上科、アシナガバエ、トンボ、蝶あるいはフナムシまで登場し、今後の展開は広範かつ急速なものとなるに相違ない。

最後に総合討論の場が設定され、編集子のように内容の理解が乏しい者に質問のできる筈はなく、質疑応答をただ面白く聞いていたが、概して専門家の質問は細かすぎてアマには分からず、アマの質問は的外れが多かったようである。

分類学・進化論にDNA解析という「ものさし」が持ち込まれたことによって、両分野とも今後は記述文学的体質からの大転換が求められることは間違いない。何よりも世界に先駆けてこのような先端的な研究成果が当学会会員の大澤省三先生の主導で成功裡に行われたことに感銘と満足を味わうことができた。

大澤先生は、このプロジェクトの終了でJT生命誌研究館を退任されるそうである。退任されたら「ねじればね」にDNA解析の解説をお願いします、と切り出したところ、ああいいですよ、といとも気安くお返事を頂戴した。楽しみにしよう。(水野弘造)

## 虫屋の広場 (26) [新刊・創刊紹介]

◎江原昭三著 「虫屋の来た道」 近代文芸社(東京都文京区目白台2-13-2, Tel. 03-3942-0869) A5判177P. 本体1700円, 1999年10月発行。

この度、指導的なダニ学者・江原昭三博士の自叙伝が出版された。博士がダニの研究に専念されたのは北大理学部助手になられてからで、それまでは昆虫の採集と研究に熱中された。特にカミキリムシの精子形成とか雄の交尾器の解剖学に関する重要な論文を発表された。その内容は本文中に説明されており、代表的なハナカミキリ雄の交尾器の図(ELYTRA, 1954)もあって大変興味深い。これらの先駆的な研究は1980年代に入ってようやくその真価が問われ、カミキリムシの分類に雄交尾器の導入が一般化されてきた。甲虫ではその外にオオニジュウヤホシテントウ各型の♀の受精囊の形態変化も図で示されている。他の昆虫の話題もつきない。さらに、ダニ学と昆虫学に共通した文献の収集法・国際学会や海外調査の体験談・同胞種と形態そして自然保護などの項目も多く述べられている。索引がないのが惜しまれる。(澤田高平)

◎宮武頼夫(1996),「青木 浩 昆虫コレクション目録」(大阪市立自然史博物館収蔵資料目録, 第28集), 132PP. 4COL.PLL.

故青木 浩氏の昆虫コレクションは総数52,583点(719箱), うち甲虫が約半数の26,069点という膨大なもので, その目録が標本データと共に公にされた. 甲虫についてはオサムシ, コガネ, カミキリ, ハムシ, ゴウムシなど665種であるが, 小型種や専門家の再検討を要すると思われる分類群は今回省かれているので, 将来PART 2 として早く日の目を見るよう希望したい. コレクションの主体は鳥取県産地のもので, 同県のファウナを研究する上で欠かせぬ資料である.

一般書店では販売されず, 同博物館で買うか, 郵便振替で「00980-1-31796, 大阪市立自然史博物館友の会」宛に, 本代(1500円)と送料を合わせて申し込む. 送料は1-2冊750円, 3冊以上については「友の会」(Tel.:06-6697-6221)に問い合わせ確認のこと. 通信欄に「青木浩昆虫コレクション目録」と明記のこと. (水野弘造)

◎初宿成彦(1999),「ミニガイドNo.16, 大阪のテントウムシ」(大阪市立自然史博物館), 30PP.

本書は初心者向けの絵解き検索図鑑で, カラー10葉を含めて斑紋の特徴から大阪産39種の大型テントウムシが簡単に同定できる優れた実用書である. 種ごとに1頁ずつ, 分布, 生息環境, 生態, 類似種との区別点などが簡潔明快に述べられ, 編集スタイルも申し分ない. 当学会運営委員の初宿氏の力作. ひろく活用されるよう望みたい.

一般書店では販売されず, 同博物館で買うか, 郵便振替で「00980-1-31796, 大阪市立自然史博物館友の会」宛に, 本代(600円)と送料を合わせて申し込む. 送料は1冊500円, 2-5冊750円. 通信欄に「ミニガイドNo.16, 大阪のテントウムシ」と明記のこと. (水野弘造)

◎「天牛通信」[No.1; 10PP.(1998.VII), No.2; 12PP.(1999.II)]

編集: 石倉まもる 〒114-0023 東京都北区滝野川6-36-5-502 Fax: 03-3576-6309

E-mail: nanacorp@gol.com

カミキリブームも過ぎ去ってしまった感の今日この頃であるが, ミニコミ誌「カミキリニュース」の活気を今一度と企画, 創刊された. 創刊号には関東の県別天牛分布表が載せられ, まだまだ記録の空白地があることを示している. 天牛界に新風を起し, 活力の源泉となるよう発展を期待したい. (水野弘造)

## 虫屋の広場 (27)

地域別総合甲虫目録[VIII]

◎区市町村単位目録・小地域目録(その5)

### 01. 北海道小樽市

大原昌宏ら(4名)(1999), 小樽市奥沢水源地地区昆虫相調査報告(12) — 1996年度マレーズトラップ調査により採集された鞘翅目について —, 小樽市博物館紀要, (12), 25-42. [48科, 224種]

### 02. 愛知県豊橋市

長谷川道明・山崎隆弘(1999), 自然環境の現況.3, 昆虫類.(7)甲虫類, 「豊橋市自然環境保全基礎調査報告書(資料編)(豊橋市), 309-335, 昆虫目録: 58-152, 甲虫目録: 118-152. [80科, 965種]

### 03. 福岡県北九州市

城戸克弥(1999), 北九州市藍島で採集した甲虫類, 北九州の昆蟲, 46(2), 105-112. [24科, 129種]

- 松永善明(1999), 風師山の昆虫(2)-(3), 北九州の昆虫, 46(1), 33-40. ; 46(2), 113-116. [6科, 128種]
04. 福岡県玄海町  
城戸克弥(1999), 福岡市周辺離島の甲虫類[XIV], 地ノ島(4), 北九州の昆虫, 46(1), 41-46. [+71種]. (合計)[365種]. {CF. 44(1), 60-64. ; 44(2), 169-175. ; 45(1), 25-32. }
05. 大分県久住町  
城戸克弥(1999), 大分県黒岳の甲虫類(11), 北九州の昆虫, 46(1), 47-49. [+32種]. (合計). [707種]. {cf. 31(2), 107-112. ; 32(1), 5-8. ; 33(2), 70. ; 40(2), 181-188. ; 41(2), 146. ; 42(2), 159-166. ; 43(2), 127-132. ; 43(2), 133-136. ; 44(1), 65-72. ; 44(2), 167-168. }
06. 島根県益田市  
松田 賢・中村慎吾(1999), 島根県高津川の昆虫類, ホシザキグリーン財団研究報告, (3), 57-119. [41科, 335種]
07. 佐賀県富士町  
廣川典範(1999), 嘉瀬川ダム建設による水没予定地の甲虫類, 佐賀の昆虫, (33), 195-207. [48科, 274種]
08. 埼玉県大滝村  
鎌倉正人(1999), 大滝村雁坂峠とその周辺の甲虫類(第1報), 寄せ蛾記, (92), 2733-2752. [26科, 118種]
09. 福島県福島市  
斎藤修司ら(1998-1999), 福島市摺上川上流域の甲虫分布資料(その3, 4, & 5, ふくしまの虫, (16), 46-50. [122種]., (17), 28-31. [68種]., (18), 72-74. [53種] (総合計)[88科, 989種]  
福島虫の会「小鳥の森」調査班(1999), 「福島市小鳥の森」とその周辺地域の昆虫, ふくしまの虫, (18), 106-134. コウチュウ目: 斎藤修司・久保田憲二; 127-130. [36科, 165種]
10. 福島県下郷町  
斎藤修司ら(5名)(1999), 1999年福島虫の会調査会報告(南会津郡下郷町), ふくしまの虫, (18), 5-26. コウチュウ目: 11-22. [63科, 526種]
11. 愛知県豊川市  
大平仁夫ら(3名)(1998), 5.昆虫, (5)コウチュウ類, 「新編豊川市史(10)自然資料」(豊川市), 225-271, 428-472. [62科, 633種]
12. 宮城県角田市  
高橋雄一(1998), 斗蔵山県自然環境保全地域の昆虫類, 「斗蔵山県自然環境保全地域学術調査報告書」(宮城県, 220PP.), 65-126. 昆虫目録: 67-119. 甲虫目: 76-89. [47科, 263種]
13. 宮城県仙台市  
斎藤勝雄・高橋雄一(1998), 仙台市青葉区塩野沢の調査記録, その2, インセクトマップオブ宮城, (9), 28-41. 甲虫目: 31-\*\*. [31科, 213種]
14. 青森県青森市  
工藤忠ら(8名)(1998), 青森市田代湿原昆虫相調査, (1997-98年)調査結果, *Celastrina*, (34), 45-72. 昆虫目録: 50-71. コウチュウ目: 56-63. [27科, 137種]
15. 和歌山県古座川町  
秋田勝己(1998), 和歌山県古座川町平井で得た甲虫類, 南紀生物, 40(2), 195-197. [32科, 105種]
16. 京都市伏見区  
上田明良(1998), 関西支所構内で誘引剤マダラコールを用いたトラップにより採集された甲虫類, 森林総合研究所関西支所年報, (39), 44-46. [25科, 85種]

17. 福岡県久留米市  
今坂正一(1998), 久留米市高良山とその周辺で採集した昆虫類(1988-1998年), KORASANA, (66), 23-60. 1PL. 甲虫目: 29-57. (久留米市)[286種], (含周辺)[367種]
18. 広島県三良坂町  
原田樹雄・中村慎吾(1996), 広島県灰塚ダム周辺地域の甲虫類, 「灰塚ダム湖とその周辺の自然」(灰塚ダム地質動植物学術調査団, 693PP.), 305-334. [46科, 344種]
19. 三重県多度町  
多度町教育委員会(1995), 「多度町史, 自然」(多度町), 762PP. 昆虫目録; 林典夫ら(4名): 727-742. コウチュウ目: 731-737. [33科, 256種]
20. 島根県瑞穂町  
福井修二(1994), 瑞穂町の甲虫類, 「島根県瑞穂町の昆虫類」(島根県昆虫研究会, 82PP.), 27-37. [45科, 245種]
21. 京都府八幡市  
谷 壽一(1993), 昆虫編, 「八幡のまちの小さな仲間たち」(八幡市自然保護課, 328PP.) 95-225. 昆虫目録: 204-222. 甲虫目: 214-222. [39科, 253種]
22. 宮城県小野田町  
郷右近勝夫ら(3名)(1991), 魚取沼自然環境保全地域の昆虫相, 「魚取沼自然環境保全地域学術調査報告書」(宮城県), 77-107. 昆虫目録: 80-102. コウチュウ目: 82-93. [23科, 141種]. (合計)[36科, 241種]
23. 島根県匹見町  
島根県昆虫研究会(1991), 島根県匹見町加令谷とその周辺における7月の昆虫類, 「匹見自然林(安蔵寺山加令谷)学術調査報告書」, 43-80. 甲虫目; 福井修二: 64-70. [42科, 162種]
24. 埼玉県入間市  
加治丘陵自然環境調査研究会(1990), 「加治丘陵自然環境調査報告書」 鞘翅目; 高橋守: 355-363. [30科, 129種]

◎ 複数市町村を包含するやや広い地域の目録

01. 北海道ニセコ山系  
佐々木邦彦(1999), ニセコ山系昆虫相調査報告(9)一鞘翅目一, 小樽市博物館紀要, (12); 97-108. [21科, 164種](合計)[29科, 222種]
02. 静岡県竜頭山(春野町/佐久間町)  
多比良嘉晃ら(3名)(1999), 竜頭山の甲虫類, 静岡の甲虫, 11(1/2), 10-52. 4PLL. [62科, 472種]
03. 神奈川県丹沢山地  
平野幸彦(1999), 堂平一丹沢山一蛭ヶ岳の甲虫類調査報告, 神奈川虫報, (127), 17-39. [48科, 330種]
04. 広島県口和町・高野町  
中村慎吾ら(3名)(1999), 広島県口和町と高野町の昆虫類, 比婆科学, (190), 1-143. コウチュウ目: 28-70. [63科, 614種]
05. (広島県・島根県) 江の川水系  
松田 賢・中村慎吾(1999), 江の川水系の昆虫類, 比和科学博物館研究報告, (37), 39-176. コウチュウ目: 74-107. [43科, 406種]
06. 長崎県島原半島  
今坂正一(1999), 島原半島の甲虫相 1, 長崎県生物学会誌, (50), 125-170. [34科, 665種] (つづく)  
(水野弘造)

## 会 報

## 日本甲虫学会会長就任のごあいさつ

佐々治 寛之

会員の直接選挙でもなく、運営委員会の推戴によって、当人不在の総会で決められたらしい。もっとも事前に了解があったので、誰かがやらねばならないからお引受けすることにした。どうやら64歳(むしの年)というシャレも関係しているという。

日本甲虫学会の前身である近畿甲虫同好会は1946年1月に会報創刊号を発刊しており、1948年創刊の「昆虫学評論」と合併し、のち現在の誌名となった。はじめの頃の会誌は茶色の粗末な紙であったが、しかし学術誌としての体裁を具備したものである。関西虫屋の商才で入手した包装紙とも聞いている。「56. 2. 3」のゴム印が付されているので、私はその頃入会し、入会と同時に創刊号からバックナンバーを入手しているから、それなりの意欲があったのだろう。いずれにしても、日本昆虫学会の「昆虫」すら順調な発行に苦慮していた終戦直後の厳しい時代に学術誌を刊行し続けて来た伝統を無駄にしたくない。

一方、日本甲虫学会と同じような分野で活動している日本鞘翅学会との協力または合併問題もないではない。それは日本昆虫学会と応用動物昆虫学会の長期にわたる合併の是非論にも似ているし、いくつかの関連学協会の連携も参考になろう。学会の運営は運営委員会や評議員、幹事におまかせしよう。もし、会長が何か言えと云うならば、「評論」は事実の記載(これも大切だが)に止まらず、意見・思想・批判を盛り込んだ「評論」にしよう。「ねじればね」は、甲虫にあらず、ひねくれ者の勝手な意見でも良い、自由な主張を満載したい。もちろん、コウチュウ目に関する軽論文も出していただこう。前述のように当学会の運営前身はアマチュア(非職業研究者)の集団であった。現在の運営委員のほとんどはアマチュアである。会長の私は大学教授であるからプロのように見えるかもしれないが、理学部や農学部で昆虫学を教えている学者ではなく、かつては教員養成、そしていまは地域環境講座の教員であるから、虫屋としてはアマチュアである。だからこそ、甲虫学会の会長を引き受けた。なぜならば、身分はアマでも学術的にはプロ相当のレベルを望むからである。

学会活動のもう一つは、会誌発行以外に発表会や採集会がある。例会の出席者があまり多くないのは何とか改善できないだろうか。講演やシンポジウムは、せめて1泊2日の日程があっても良いのではないか。鞘翅学会や昆虫分類学会との共催も良いかもしれない。

振り返ると、初期の会報は戸澤信義(以下敬称略)の序文に始まり、大倉正文、林 匡夫、後藤光男、大澤省三、黒澤良彦、中根猛彦、伊賀正汎、黒佐和義などアマチュアと新進の研究者が肩を並べている。それから35年経って私は「昆虫学評論」54巻2号に6頁ばかりの小論文を書いた。日本から初めての甲虫の科、ヒゲコメツキダマシである。知られざることの発見は貴重であり愉快、ホソキカワムシ科の日本からの発見は1961年、ミジンクスイ科は1964年の思い出である。

さて、私は甲虫学会の発展のために何をすれば良いのだろうか。月並みなことながら、長老というべき先達のご鞭撻を戴きながら、若い学究のエネルギーを結集して、従前にも増して日本の甲虫界を代表するにふさわしい会にする抱負をここに表明し、諸賢の協力を会長として期待する。

## 第51回 (1999年度) 大会記録

第51回大会は1999年12月12日に大阪市立自然史博物館において開催された。例年通り午前中は自由懇談で、午後1時より会務報告と講演があった。会務報告では新会長・佐々治寛之先生と運営委員の追加・谷角素彦氏と伊藤昇氏の提案が承認された。

その後、琵琶湖博物館の八尋克郎氏の『オサムシ上科における上位分類の変遷』と京都大学の曾田貞滋氏・谷垣岳人氏による『甲虫の分子系統解析—オサムシ、ヒメハナカミキリを例として—』の二題の講演が行われた。大会終了後、例年通り有志により阿倍野の中華料理店・桃谷楼で懇親会がもたれた。

秋田勝己・荒谷邦雄・芦田 久・濱口正博・春沢圭太郎・林 靖彦・穂積俊文・生谷義一・今坂正一・伊藤 昇・伊藤建夫・岩田隆太郎・亀澤 洋・官能健次・桂孝次郎・河上康子・岸井 尚・北山 昭・北山健司・黒田祐次・楠井善久・近 雅博・的場 績・三木三徳・水野弘造・中村知史・生川展行・野村英世・大石久志・奥田則雄・奥田好秀・大塚 勲・尾崎俊寛・斎藤秀生・斎藤昌弘・斎藤琢巳・澤田高平・塩崎明生・初宿成彦・曾田貞滋・高羽正治・高井 泰・田中 勇・田中昭太郎・谷垣岳人・谷角素彦・塚本圭一・八木正道・八尋克郎・山地 治・横関秀行・吉田正隆。(敬称略、アルファベット順)

(伊藤建夫)

## 会計報告

1999年(平成11年)の収支状況を報告します。昨年の単年度収支は1996年より4年連続で黒字となり、永年の課題であった赤字体質の収支も着実に改善され、次年度繰越金827,995円が出るまでに財政の再建が達成されました。これは収入面では年会費の順調な納入、新入会員の増加による増収と支出面での諸経費の節減に依るものです。今後とも会員の皆様のご助力をお願いします。(野村英世)

1999年度(平成11年度)収支決算書  
(自 99年 1月 1日 至 99年12月31日)

収入の部		支出の部	
会費	1,620,000	印刷代	1,360,800
バックナンバー代	60,000	会誌送料	276,940
別刷代	218,777	ねじればね, 昆虫学評論	
広告料	200,000	別刷送料	31,950
寄付*	37,500	外国向交換雑誌送料	16,553
利息	210	本部移設に伴う文献輸送費	23,370
会預かり金	28,000	大会・採集会行事費	10,925
		会議費	6,410
		事務経費(郵送ラベルその他)	59,028
前年度繰越金	449,484	次年度繰越金	827,995
計	2,613,971	計	2,613,971

\*) 岸井 尚氏より寄贈いただいたコメツキムシの別刷を会員諸氏に頒布した代金です。岸井氏に厚くお礼申し上げます。なお、残部が若干ありますので、希望の方は水野弘造氏まで申し込んで下さい。

#### 会費納入のお願い

本学会の会費は前納制です。自身の会費納入状況は封筒の宛名の下に記入してあります。2000年度(第55巻分)会費5000円を未納の方には振替用紙を同封させていただきましたので、早急にお納め下さい。また、従来発行してました領収書(会員証)は事務処理の軽減と経費節約のため今後は発行しませんが、必要な方はその旨御連絡下さい。したがって、振替用紙の控は領収書として保存願います。会費について何か不明な点がありましたら、会計(野村英世)まで御連絡下さい。  
(運営委員会)

発行: 2000.3.15 日本甲虫学会

(本部) 〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園1-23 大阪市立自然史博物館・昆虫研究室気付

振替口座: 00990-8-39672 URL: <http://www.mus-nh.city.osaka.jp/jcs.html>

Tel: 06-6697-6221 Fax: 06-6697-6225 E-mail: shiyake@mus-nh.city.osaka.jp

昆虫学評論原稿送付先(英文)

〒666-0116 川西市水明台3-1-73

林 靖彦 Tel. 0727-93-3712

E-mail: hayashiy@silver.ocn.ne.jp

ねじればね原稿送付先(和文, E-mailでの投稿を歓迎します)

〒611-0002 宇治市木幡熊小路19-35

水野弘造 Tel.(Fax) 0774-32-4929

E-mail: kzmizuno@oak.ocn.ne.jp

〒614-8371 八幡市男山雄徳8 E7-303

伊藤建夫 Tel.(Fax) 075-983-3491

E-mail: itokyoto@gb3.so-net.ne.jp

入会及び会費問合せ先(年会費5,000円, 入会金は不要)

〒590-0144 堺市赤坂台1-18-5

野村英世 Tel. 0722-98-4066